
真夜中の魔女が待っている

柚木あずさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夜中の魔女が待っている

【Nコード】

N0742K

【作者名】

柚木あずさ

【あらすじ】

公園には魔女がいた。

静まり返った闇の中を駆ける。夜風にさらされた肌は痛いほどに冷え、今にも弾けそうなほど張りつめている。

民家の明かりもまばらな時刻。近道に利用している公園では蛍光灯がついに寿命を迎えていた。

闇に沈む公園でドーム状の遊具からは橙色の明かりが漏れていた。覗き込むと、ドームの中央に置かれた蠟燭を抱え込むように女性が横たわっている。温かくも頼りない光に包まれ、呑気な寝息を立てていた。

あいかわらず無防備な。

白いため息をつくと中へ入り込んだ。声をかけても女性は寝返りひとつ打たない。ポケットに突っこんでいた缶の一つをそつとあてがう。

「こんな所で寝てたら死ぬぞ」

コンビニで大切に暖められていた缶だ。その熱量は侮れない。ぐいと押しつけると、女性はようやく瞼を押し上げた。

「お姫様は死なずに眠ってるもんだよ」

目覚めの一声をはいはいと適当にいなされ、むくれながらも女性は起き上がる。缶を受け取り、まずはぬくもりを味わうかのように赤らんだ頬を擦りつけた。

「今夜は眠り姫か？ それとも白雪姫？」

「どっちもハズレ。私は魔女だから」

魔女。

それがこの女性の肩書きだ。それ以外のことは一切不明である。明かす気はないだろうし、聞く気もない。重要なのは来るかも分らないアルバイターのために質素な茶会を開く酔狂な女である、という一点に尽きる。

「さてさて本日は紅茶クッキー。茶葉を生地に混ぜて角切りリンゴ

をアクセントに入れてみました。おいしいよ、白雪君。ぜひとも慌てて食べておくれ」

「ゆっくり味わうとするよ」

渡された茶請けを頬張った。果肉がシャリツと碎けるたびにほのかな酸味が口内に広がる。今日はコーヒーで正解だと呟けば、コーヒークッキーにすれば良かったね、と意地悪い返しが待っていた。

吹き込んだ風に、蠟燭の炎が揺れた。小さいながらも灯りには意地があるらしい。ドームの中に侵食してきた闇をしっかりと押し返していた。暖かくなってきたとはいえまだまだ冬だと身を縮こめる。「お前さ、この公園で寝泊まりしてるわけじゃないよな」

「今更だね。十夜一夜の仲なのに」

うるせえ、と軽く流すとくぐもった笑い声が小さなドームの中に響く。

「こんな夜更けに何してるんだよ」

「王子様を待つてる」

口に含んでいた黒い液体が気管へと流れ込んだ。

「男連れで待つやつがいるか！」

「騙されてくれるほど鈍くはないか。まあ、お迎えを待つてるのは本当だよ」

魔女はすつと、ドームに開けられた穴の外を指さす。切り取られた夜空の中には、少し欠けた月がぼっかりと浮かんでいた。

「満月の夜に迎えが来る。明日のを逃しても不法滞在で強制退去させられるけど」

「……魔女の世界も世知辛いな」

「ま、どこも似たようなもんよ。ホウキで飛べれば話は変わるけどあいにく無免許でね。お迎えを素直に受け入れないと」

「今度はかぐや姫か。白雪姫になったりシンデレラになったり、魔女も忙しいようで」

「こっちでも有名人だっけ、かぐや姫。公達の心を奪い去り、千年の時を超えて語り継がれる希代の魔女。私たちの憧れだよ」

思わず向き直ると目線がかち合った。魔女はにまりと笑んでいた。

明日はきつと雨だから。

魔女が別れ際につぶやいた言葉は呪文か何かだったのだろう。その言葉に従うように、今晚は細かい雨粒が降り注いでいた。

傘を差す必要があるのか分からない程度の小雨。しかしぬかるんだ地面の上では夢見が悪い。きつと彼女は来ない。暖かい飲み物を用意するのも、今夜で終わりだ。

携帯電話を取り出す。残り十数分で日をまたぐ。日付が変われば魔法は解けるのだろう。いつも以上に冷たい風が魔法の残り香を奪い去っていく。見上げた空はどんよりと黒く泣いていた。

画面に視線を戻す。無機質に時刻を告げるデジタル時計は、吐息で次第に曇っていった。

ぬぐおうと指を動かしたその刹那。ぽんと背をたたかれた。

「携帯なんかじゃ良い夢は見れないよ」

「……なら、これは悪夢か」

緩みそうになる顔面の筋肉を引き締める。毎夜蠟燭を手に待っていた魔女は、今宵はマツチの小さな灯火で夜闇を退けていた。

「来ないと思ってた」

魔女はうつむきくすりと笑った。ビニール傘をくるくると回しながら、器用に二本目のマツチを点ける。ぽんと箱を投げ渡し、お前もやれ、と顎で催促してきた。明かりが増えると魔女は満足げに目を細める。

「良い夢見れそう？」

「最後はマツチ売りの少女か。やっぱり悪夢だな。うつかりしたら凍死体の出来上がりだ」

箱を返すと、すぐさまシュツと擦れる音がする。

「王子様としては失格だね。ロマンが無い」

返す言葉もなく炎のリレーを続けた。

お菓子ではなく、時間とマッチとを食いつぶす。茶会でもなんでもない。静けさが耳に痛かった。残りは、二本。

ほぼ空の箱を振ってみせると、魔女は何かをつぶやきながら歩み出た。なでるような風に傘がふわりと飛び上がり、魔女の持つ炎が大きく揺れる。

反射的に炎を灯した。これは夢ではない。幻でもない。魔女は確かにそこにいる。儚くも、おぼろげでもない。夜闇の中にくっきりと浮かぶ女性は柔和な笑みを浮かべ、絡みつくような視線を投げかけている。

「時間だ　月が、満ちる」

魔女はゆっくりと空を指さした。つられて見上げると、雲間から光が差し込んでいた。

縁をうつすらと覗いてた月が徐々に姿を現していく。三日月、半月、小望月。すっぽりと覆われていた月がその全貌を見せたとき、手元でジュツと音がした。傘から垂れた水滴が、マッチの炎を喰らったのだ。

魔法は十二時に消えるもの。魔女を名乗る女性は、煙のように失せてしまった。

視界の端にはビニール傘が転がっている。ずいぶんと安っぽいお姫様だ。人を失格者呼ばわりしたくせ、不死の妙薬もガラスの靴も残してはいかなかった。泥のついた傘を拾い上げ、雲に沈んだ夜空を仰ぎ見る。

王子様になんかなってやらないからな。

自嘲気味につぶやくと、ポケットに突っ込んだマッチがカラリと音を立てた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0742k/>

真夜中の魔女が待っている

2010年10月8日14時35分発行